

# 小学校時の英語学習に対する意識とその関連要因

及 川 賢 教育学部言語文化講座英語分野

キーワード：小学校、中学校、外国語活動、英語、好き・嫌い

## 1. はじめに

本稿は、小学校時及び中学校時の英語の好き・嫌いの変化とそれに関わる要因を調査した及川(2016)で使用したデータを、異なる手段で再度分析したものである。先の調査では、小学校時と中学校時における英語への好き・嫌いの変化と英語学習に関わる要因の関係性を検証しているが、本調査では、特に小学校時における英語への好き・嫌いに焦点を当て、どのような要因がどのように関わっているのかを新たに調査している。

本稿を含む一連の調査は「小学校では英語が好きだったのに中学校では歌やゲームがなく、文法が中心で、英語が嫌いになった生徒が多い」という言説に対する疑問から始まっている。これらの言説は、客観的なデータ等による裏付けがないまま流布している感がある。しかし、筆者自身による調査を含め、反証となるデータも提供されるなど、実態は不明確な点が多い。その一端を明らかにすることが本稿の目的でもある。

小学校での英語教育は、正式には「外国語活動」という名称だが、現行の学習指導要領が「英語を原則とする」と明記するなど、実際には英語がほぼ100%を占める状況である。そこで本稿では特に必要な場合を除いて、便宜上「外国語」ではなく「英語」を用いる。もちろんこれは決して他の言語を軽視しているわけではない。また小学校では「児童」、中学校では「生徒」と区別することが一般的だが、必要な場合と除いて「生徒」に統一する。

## 2. 関連文献

及川(2015)及び及川(2016)で概観した通り、小学生や中学生の英語の好き・嫌いに関する全国的な調査はBenesse教育開発センター(2012)など数点に限られている。いずれも、中学校で英語が嫌いと回答している生徒が一定数はいるものの、中学校で英語が嫌いになる生徒が「多い」と言えるほど増えているとは言い難い。また、好き・嫌いの理由や関連する要因についてのデータは含まれていない。

その点に込んでいるのが、國友(2012)、井田(2015)、及川(2015)、及川(2016)である。これらが共通して指摘していることは以下の2点である。

- 1) 小学校時に英語が好きだったが中学校時に英語が嫌いになった生徒は一定数存在するが、その逆に、小学校時に英語が嫌いだったが中学校時に英語が好きになった生徒も一定数存在する。
- 2) 英語が好きになった、あるいは嫌いになった大きな要因としては、英語のできる・できないに関わる項目が多い。

これらの調査は中学生を対象としている。彼らに小学校時及び中学校時の英語の好き・嫌いを尋ね、その結果をもとに全体を以下の4つのグループに分け、それぞれの理由や関連すると思われる要因を明らかにしている。

- ①小学校の「外国語活動」が好きだった・中学校の「英語」も好きだった
- ②小学校の「外国語活動」は好きだった・中学校の「英語」は嫌いだった
- ③小学校の「外国語活動」は嫌いだった・中学校の「英語」は好きだった
- ④小学校の「外国語活動」が嫌いだった・中学校の「英語」も嫌いだった

國友（2012）は134名の中学生を対象にアンケートを実施した。回答結果をもとに参加者を上記の4つのグループに分け、それぞれに、その理由を尋ね、5件法で回答してもらった。その結果、中学校で英語が嫌いになった参加者（②のパターン）には「新しい単語を覚えるのが難しい」「文章になるとわからない」「単語の読み方がわからない」「テストでよい点が取れない」など「能力」に関わる項目が好き・嫌いに影響を及ぼすことが多いこと、小学校の特徴とされる歌やゲームが中学校で少なくなったことが大きな原因ではないことが明らかになった。一方、小学校では英語が嫌いだったが、中学校で好きになったというグループ（③のパターン）の理由は「文字を勉強できるようになったから」「新しい単語を覚えるのが楽しい」「自分の思いを表現できるから」など、こちらも能力に関わる項目が好き・嫌いに影響を及ぼすことが明らかになった。すなわち、「好き→嫌い」の場合でも「嫌い→好き」の場合でも、「できる・できない」という「能力」に関する要因が影響を与えている可能性が高いことを指摘した。

井田（2015）は757名の公立中学校の1～3年生を対象に國友と同様の調査を行い、同様な結果を得ている。井田は記述を主としたアンケートを作成し、回答を自身の基準で分類したのちに集計を行っているが、ここでも、小学校時、中学校時いずれも肯定的な回答のほとんどが「わかる、できる」「楽しい」「有用性を感じる、興味がある」「学外の体験がある」のいずれかに分類できた。否定的回答はこれらの逆で「わからない、できない」「楽しくない」「有用性を感じない、興味がない」のいずれかに分類できた。ここでも「できる・できない」という能力が大きく関わっていることがわかる。

及川（2016）は510名の中学3年生を対象にアンケートを実施し、彼らの英語の好き・嫌いに関連する要因を調査した。まず、参加者の小学校時及び中学校時の英語の好き・嫌いにに関する回答をもとに全体を4つのグループに分けた。それぞれの人数及び割合は以下の通りである（図1）。なお、無回答が9名いたため、パーセンテージの合計は100%にならない。

- 第1グループ：小学校は好きで中学校も好き：232人（45.5%）
- 第2グループ：小学校は好きで中学校は嫌い：97人（19.0%）
- 第3グループ：小学校は嫌いで中学校は好き：73人（14.3%）
- 第4グループ：小学校は嫌いで中学校も嫌い：99人（19.4%）

「中学で嫌いになる生徒」は確かに存在するものの、全体の中での割合は19.0%となっており、決して高くはない。逆に中学校になって英語が好きになったと回答している生徒も14.3%存在し

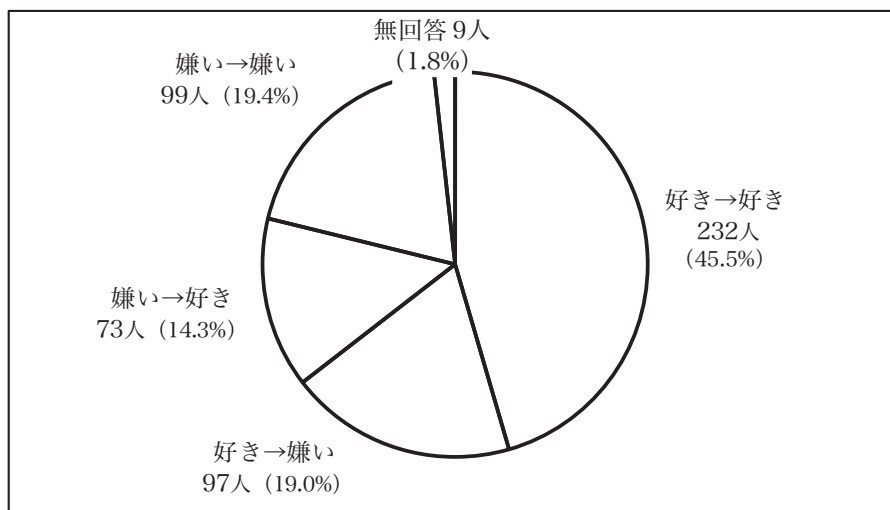


図1 小学校時から中学校時への英語の好き・嫌いの変化の割合

ており、必ずしも少ないわけではない。

続いて、英語に関わる下記の20項目のアンケートに回答してもらった。【 】内は本稿で使用する略称で、各文の始めにある数字は実際のアンケートで使用した順序を示している。なお、11番の「成績」は小学校ではあてはまらないので、中学校時の部分のみを回答してもらった。

○英語学習の得意・不得意に関する項目（11項目）

01はじめて見る英単語の読み方がすぐにわかりましたか？【Phonics】

02英単語や英熟語を覚えることは得意でしたか？【単語】

03英語を発音することは得意でしたか？【発音】

04英語の文法は得意でしたか？【文法】

05英語を聞くことは得意でしたか？【聞く】

06英語を話すことは得意でしたか？【話す】

07英語を読むことは得意でしたか？（→小学校で英語の文章を読んだことがなければ「中1～2」のみ記入）【読む】

08英語を書くことは得意でしたか？（→小学校で英語の文を書いたことがなければ、「中1～2」のみ記入）【書く】

09先生や友達と英語で会話することは得意でしたか？【会話】

10授業の内容は簡単でしたか？【授業簡単】

11中学校では英語のテストがありますが、テストやそれにより成績がつくことをどう思いますか？【成績】（→中学校用のみ使用）

○英語学習の好き・嫌いに関する項目（5項目）

12英語の授業で英語の歌を歌うことは好きでしたか？【歌】

13英語の授業でゲームやコミュニケーション活動をするのは好きでしたか？【ゲーム】

15英語は好きでしたか？【英語好き】

16英語の授業は好きでしたか？【授業好き】

20小学校、中学校で使った英語の教科書をどう思いますか【教科書】

○英語の有用性に関する項目（2項目）

14英語を学ぶと将来の自分に役立つとっていましたか？【役立つ】

17将来英語を使って仕事をしたいとっていましたか？【英語仕事】

○英語や英語圏への興味（2項目）

18アメリカ、オーストラリア、イギリスなどの英語圏に興味関心がありましたか？【英語圏】

19将来英語を使える国（アメリカ、オーストラリア、インドなど）に旅行や留学をしたいとっていましたか？【旅行留学】

生徒はいずれも5段階のリカートスケールで回答する。「英語学習の得意・不得意に関する項目」が多いのは、國友（2012）、井田（2015）、及川（2015）でこれらが英語の好き・嫌いを分ける大きな要因であることが明らかになっており、そのため、その中でもどの項目が好き・嫌いを分ける要因としてより重要なのかを明らかにするためである。

また、小学校時と中学校時の変化を確認するため、下記のように小学校5～6年時と中学校1～2年時の両方について回答してもらった。

【例】

02【英単語や英熟語を覚えることは得意でしたか？】

得意だった    やや得意    どちらともいえない    やや苦手    苦手だった

小5～6： 5-----4-----3-----2-----1

中1～2： 5-----4-----3-----2-----1

もしある生徒が「小5～6」で「2」と回答し、「中1～2」で「4」と回答したとすれば、その生徒は小学校時には英単語等を覚えることをやや苦手と感じていたのに、中学校ではやや得意になったということになる。

アンケートは2015年5～6月に実施校に配布・実施・回収を依頼した。実施に要した時間は15分程度である。分析の結果、「小学校は好きで中学校は嫌い」と回答した生徒たち（＝第2グループ）は、「小学校は好きで中学校も好き」と回答した第1グループと比較した場合、「単語」「発音」「話す」「書く」「会話」「英語好き」「役立つ」の項目で、中学校時の回答の値が小学校時よりも大きく下回っている。また、「文法」「ゲーム」「Phonics」「読む」「教科書」「英語仕事」「英語圏」「旅行留学」も同様に中学校時の回答のほうが値を下げている（19項目中15項目で違いが見られる）。

一方、「小学校は嫌いで中学校は好き」と回答した第3グループは「小学校は嫌いで中学校も嫌い」と回答した第4グループと比較した場合、19項目中「単語」「発音」「文法」「聞く」「話す」「読む」「書く」「会話」「ゲーム」「英語好き」「英語仕事」「英語圏」「旅行留学」「授業簡単」の14項目で中学校時の値が有意に大きくなっていった。

これらの結果を統合し、より変化の大きかった「単語」「発音」「話す」「書く」「会話」「英語好き」の5つが英語の好き・嫌いの変化に深く関わっている可能性がある」と指摘した。さらに、これらは、「語彙力」（「単語」）と「産出力」（「発音」「話す」「書く」「会話」）に分類が可能で、この2つの要因が英語の好き・嫌いに深く関わっている可能性がある」と指摘している（「英語好き」は因果関

係の判断が難しいため除外)。なお、研究のデザイン上、生徒の英語の好き・嫌いとこれらの項目の因果関係を証明することはできないので、あくまでも、関連の深さから推測するのみであることが述べられている。

及川 (2016) は各グループの小学校時と中学校時の変化を統計的に算出し、ペアとなるグループの変化の度合いと比較をしているが、それらのペアを直接統計的に比較しているわけではない。そこで、本論では小学校時に英語が好きだった第1グループと第2グループ、英語が嫌いだった第3グループと第4グループのそれぞれの小学校時に関する回答を直接比較することで、変化に強く関連している項目が小学校の時点で現れているかどうかを検証する。

### 3. 研究

#### 3-1 目的

本調査の目的は小学校時及び中学校時に英語の好き・嫌いが変化した生徒の小学校時の特徴を明らかにすることである。より具体的には、以下の2つのリサーチ・クエスチョン (RQ) に答えることである。

RQ-1：小学校時は英語が好きで中学校時は英語が嫌いになった生徒たちは、小学校時も中学校時も英語が好きだった生徒たちと比べた場合、自分たちの小学校時の英語やその関連要因にどのような印象を持っているのか。

RQ-2：小学校時は英語が嫌いで中学校時は英語が好きになった生徒たちは、小学校時も中学校時も英語が嫌いだった生徒たちと比べた場合、自分たちの小学校時の英語やその関連要因にどのような印象を持っているのか。

及川 (2016) が中学校で英語が嫌いになった生徒 (第2グループ) 及び好きになった生徒 (第3グループ) それぞれの小学校から中学校への変化を基礎にして検証しているのに対し、本論は両グループの生徒の小学校時の特徴をそれぞれ第1グループ、第4グループと比較することで明らかにしていく。

研究全体のデザインを前回と比較すると、以下の通りとなる。

及川 (2016)	本論
第1グループ：小学校←比較→中学校 ↗ 比較	第1グループ (小学校時) ⇄ (比較)
第2グループ：小学校←比較→中学校 ↘	第2グループ (小学校時)
第3グループ：小学校←比較→中学校 ↗ 比較	第3グループ (小学校時) ⇄ (比較)
第4グループ：小学校←比較→中学校 ↘	第4グループ (小学校時)

ただし、本調査のデザイン上、生徒の英語の好き・嫌いの原因を明らかにすることは難しい。それらの関連の度合いを示すことで原因の推測を試みるものの、因果関係を直接明らかにするものではない。

また、参加者全員の小学校時の回答をもとに因子分析を行い、関連する要因の特徴をより抽象化し、要因数を減らしてより捉えやすくすることも同時に試みる。

### 3-2 使用データ

本稿では及川（2016）で用いたデータを使用する。これは510名の公立中学校3年生を対象としたアンケート調査で、20の質問項目（5件法）から成っている。ただし、テストや成績に関する項目は小学校では当てはまらないので、今回対象となったのは19項目である。「2. 関連文献」でも紹介しているが、同じ質問項目に小学校5～6年時と中学校1～2年時の印象を回答してもらうことで、その要因の変化と英語の好き・嫌いの変化の関連の強さを明らかにしている。ただし、本調査は主に生徒の小学校時の回答結果が分析の対象となっている。詳しくは及川(2016)を参照。

### 3-3 分析方法

分析の直接の対象は第2グループ（好き→嫌い）と第3グループ（嫌い→好き）であるが、それぞれの小学校時の特徴を明らかにするために、それぞれ第1グループ（好き→好き）、第4グループ（嫌い→嫌い）と比較する。

検定にはノンパラメトリック検定を用いる。独立する複数のグループの平均の比較には $t$ 検定や分散分析を用いることが多いが、それらの使用にはデータの尺度が少なくとも間隔尺度である必要がある。しかし、リカートスケールは目盛りの間隔が一定であることが保証できないので、本調査ではノンパラメトリック検定を用いた（竹内・水本、2014）。より詳しい手法は結果の欄で述べる。

## 4. 結果

### 4-1 全グループの小学校時の比較

分析では第1グループと第2グループの比較及び第3グループと第4グループの比較を中心にを行うが、他の比較も行うため、対応のない2群の比較に用いるマン・ホイットニーの検定ではなく、対応のない3群間以上の比較に用いるクラスカル・ウォリス検定を用いてアンケートの19項目を分析した。その結果、19項目すべてにおいて1パーセント水準で有意差が確認できた（表1）。

続いて、4つのグループ間のどこに有意差が現れているかを確認するために多重比較を行った。クラスカル・ウォリス検定の多重比較として、マン・ホイットニーの検定を使用した（竹内・水本、2014）。ただし、マン・ホイットニーを繰り返し使用するため、有意水準の調整としてボンフェローニの補正を行った。具体的には、第1～4の4グループのうちの2グループの比較する場合、その組み合わせは6パターンとなるため、5%の6分の1である0.83%未満を有意とみなした（1%水準は、0.167%未満に変換）。

このうち、本稿では「第1グループと第2グループの比較」と「第3グループと第4グループの比較」を使用した。

表1 全グループの小学校時の回答の比較（クラスカル・ウォリス検定）

	カイ2乗	P	r	効果量解釈
Phonics	70.977	0.00**	0.276	小
単語	88.472	0.00**	0.279	小
発音	93.345	0.00**	0.272	小
文法	66.164	0.00**	0.290	小
聞く	85.155	0.00**	0.273	小
話す	97.970	0.00**	0.272	小
読む	72.114	0.00**	0.308	中
書く	72.567	0.00**	0.312	中
会話	97.360	0.00**	0.281	小
授業簡単	77.929	0.00**	0.280	小
歌	48.905	0.00**	0.274	小
ゲーム	83.844	0.00**	0.274	小
役立つ	64.927	0.00**	0.274	小
英語好き	224.040	0.00**	0.269	小
授業好き	207.709	0.00**	0.269	小
英語仕事	112.259	0.00**	0.270	小
英語圏	78.600	0.00**	0.269	小
旅行留学	65.970	0.00**	0.269	小
教科書	74.299	0.00**	0.273	小

（自由度はすべて「3」）

#### 4-2 英語が「好き→嫌い」と変化した生徒の小学校時の特徴

英語が「好き→嫌い」と変化した第2グループの特徴を明らかにするために、彼らと同様に小学校時に英語が好きだったと回答した第1グループ（「好き→好き」）のデータを比較に使用した（表2）。

検定の結果、有意差が確認できたものは以下の7項目である。

- 英語学習の得意・不得意に関する項目：「読む」「書く」
- 英語学習の好き・嫌いに関する項目：「英語好き」
- 英語の有用性に関する項目：「英語仕事」「役立つ」
- 英語や英語圏への興味：「英語圏」「旅行留学」

平均ランクを確認すると、いずれも第1グループのほうが高い値を示している。すなわち、小学校時は英語が好きだったのに中学校時は英語が嫌いになった第2グループは、小学校の時点で上記の項目で有意に低い値を示している。

この結果を前回の及川（2016）と照らし合わせて解釈を加えてみたい。前回は第1グループと第2グループの伸びを比較した結果、第2グループはほとんどの項目で得意だという印象や好きだという印象が落ちていることが明らかになった（表3）。

表2 小学校時に英語が好きだった生徒（第1グループと第2グループ）の小学校時の回答の比較

	<i>U</i>	<i>P</i>	<i>r</i>	効果量解釈
Phonics	9,405.00	0.148	0.08	ほとんどなし
単語	9,034.00	0.160	0.08	ほとんどなし
発音	9,426.00	0.059	0.11	小
文法	6,971.50	0.035	0.13	小
聞く	9,671.00	0.237	0.07	ほとんどなし
話す	9,039.50	0.016	0.14	小
読む	4,864.00	0.003*	0.19	小
書く	4,984.50	0.004*	0.18	小
会話	8,099.50	0.060	0.11	小
授業簡単	8,687.00	0.357	0.05	ほとんどなし
歌	9,554.00	0.393	0.05	ほとんどなし
ゲーム	10,010.50	0.769	0.02	ほとんどなし
役立つ	7,209.50	0.000**	0.24	小
英語好き	8,681.00	0.001*	0.19	小
授業好き	10,260.00	0.225	0.07	ほとんどなし
英語仕事	7,510.50	0.000**	0.27	小
英語圏	9,212.50	0.008*	0.15	小
旅行留学	8,101.00	0.000**	0.23	小
教科書	9,099.50	0.019	0.13	小

表3 第1グループ（好き→好き）と第2グループ（好き→嫌い）の比較（及川、2016）

		好き→好き (第1グループ)	好き→嫌い (第2グループ)	嫌いになった生徒は好きなままだった生徒に比べて、中学で
英語学習の得意・不得意に関する項目	Phonics	小 < 中	NS	上がらなかった
	単語	小 < 中	小 > 中	大きく下がった
	発音	小 < 中	小 > 中	大きく下がった
	文法	NS	小 > 中	下がった
	聞く	NS	NS	同じ
	話す	小 < 中	小 > 中	大きく下がった
	読む	小 < 中	NS	上がらなかった
	書く	小 < 中	小 > 中	大きく下がった
	会話	小 < 中	小 > 中	大きく下がった
英語学習の好き・嫌いに関する項目	授業簡単	小 > 中	小 > 中	同じ
	歌	小 < 中	小 < 中	同じ
	ゲーム	NS	小 > 中	下がった
	英語好き	小 < 中	小 > 中	大きく下がった
	授業好き	NS	NS	同じ
英語の有用性に関する項目	教科書	小 < 中	NS	上がらなかった
	役立つ	小 < 中	小 > 中	大きく下がった
英語や英語圏への興味	英語仕事	小 < 中	NS	上がらなかった
	英語圏	小 < 中	NS	上がらなかった
	旅行留学	小 < 中	NS	上がらなかった



「読む」ことについては、小学校の時点で第2グループのほうが読むことが得意ではないと答えている。しかし、彼らの中学生時の回答と小学校時の回答との間に統計的な有意差はなく、彼らは得意になったわけでも不得意になったわけでもない。一方、英語が好きなままであった第1グループは小学校時よりも中学校時のほうが読むことは得意と答えている（統計的有意差あり）。第2グループの得意の度合いが落ちたからではなく、上がらなかったことが、英語が嫌いになったという事実と関連している可能性が指摘できる。

「書く」ことについても、小学校の時点で第2グループのほうが書くことが得意ではないと答えている。また、中学校時の回答から、彼らはさらに不得意になっていることがわかる（統計的有意差あり）。一方、英語が好きなままであった第1グループは書くことがさらに得意になっている（統計的有意差あり）。「書くこと」への意識の差が広がっており、及川（2016）でも指摘している通り、英語の好き・嫌いに強く関連している可能性が考えられるが、さらに今回の調査で、小学校の時点ですでにその兆候が見られることが明らかになった。

次に「英語好き」は小学校時に第2グループより第1グループの値が高いが、記述統計の平均値（及川、2016、で示している）を見ると、どちらも5段階リカートスケールの中央の値である3を超えている。すなわち、第2グループも英語は好きと答えているが、第1グループのほうがより英語が好きだったということである。しかし、中学校時では、第1グループが好きの値がさらに大きくなっている（統計的有意差あり）のに対し、第2グループは値が有意に下がっており、しかも、その値が3を大きく下回っている（2.28）。

「役立つ」も小学校時に第2グループより第1グループの値が高いが、記述統計の平均値（及川、2016、で示している）を見ると、どちらも5段階リカートスケールの中央の値である3を超えている。すなわち、第2グループも英語は好きと答えているが、第1グループのほうがより英語が好きだったということである。しかし、中学校時では、第1グループの好きの値がさらに大きくなっている（統計的有意差あり）のに対して、第2グループは値が有意に下がっている。

「英語仕事」「英語圏」「旅行留学」の3つは同じパターンを示している。小学校時、第1グループはこれらすべてに平均で3以上の回答を示しているが、第2グループはすべて3を下回っている。また、中学生時に第1グループの値は有意に高くなっているのに、第2グループは統計的に有意な変化は見られない。しかも、平均値はすべて3を下回っている。これらの3項目はすべて英語の使用に関わる項目である。英語が小学校・中学校とも好きなままであった生徒が小学校時に英語圏に興味を持ち、英語を使用してみたいという思いを持ち、それが中学校時にはさらに伸びているのに、英語が「好き→嫌い」と変化した生徒は、小学校時に英語圏への興味や使ってみようという欲求が低く、中学生になっても上昇しない。因果関係は証明できないが、英語が中学校時に嫌いになった要因との関連を十分に指摘できるだろう。

#### 4-3 英語が「嫌い→好き」と変化した生徒の小学校時の特徴

英語が「嫌い→好き」と変化した第3グループの特徴を明らかにするために、彼らと同様に小学校時に英語が嫌いだったと回答した第4グループ（嫌い→嫌い）のデータを比較対象として使用した（表4）。

検定の結果、有意差が確認できたものは以下の6項目である。

表4 小学校時に英語が嫌いだった生徒（第3グループと第4グループ）の小学校時の回答の比較

	<i>U</i>	<i>P</i>	<i>r</i>	効果量解釈
Phonics	2,761.50	0.370	0.07	ほとんどなし
単語	2,322.50	0.024	0.18	小
発音	2,605.50	0.011	0.20	小
文法	1,943.50	0.004*	0.24	小
聞く	2,579.50	0.009	0.20	小
話す	2,645.00	0.007*	0.21	小
読む	1,688.50	0.042	0.18	小
書く	1,509.50	0.111	0.15	小
会話	1,997.00	0.000**	0.30	小
授業簡単	2,412.50	0.012	0.20	小
歌	3,169.50	0.596	0.04	ほとんどなし
ゲーム	2,478.50	0.006*	0.22	小
役立つ	2,980.50	0.244	0.09	ほとんどなし
英語好き	2,794.50	0.019	0.18	小
授業好き	2,674.50	0.006*	0.21	小
英語仕事	2,038.50	0.000**	0.38	中
英語圏	2,833.50	0.028	0.17	小
旅行留学	2,792.00	0.017	0.18	小
教科書	3,240.50	0.744	0.03	ほとんどなし

表5 第3グループ（嫌い→好き）と第4グループ（嫌い→嫌い）の比較（及川、2016）

		嫌い→好き (第3グループ)	嫌い→嫌い (第4グループ)	好きになった生徒は嫌いなままだった生徒に比べて、中学で
英語学習の得意・不得意に関する項目	Phonics	小<中	小<中	同じ
	単語	小<中	NS	上がった
	発音	小<中	NS	上がった
	文法	小<中	NS	上がった
	聞く	小<中	NS	上がった
	話す	小<中	NS	上がった
	読む	小<中	NS	上がった
	書く	小<中	NS	上がった
	会話	小<中	NS	上がった
	授業簡単	NS	小>中	下がらなかった
英語学習の好き・嫌いに関する項目	歌	小<中	小<中	同じ
	ゲーム	小<中	NS	上がった
	英語好き	小<中	NS	上がった
	授業好き	小<中	小<中	同じ
	教科書	小<中	小<中	同じ
英語の有用性に関する項目	役立つ	小<中	小<中	同じ
	英語仕事	小<中	NS	上がった
英語や英語圏への興味	英語圏	小<中	NS	上がった
	旅行留学	小<中	NS	上がった

- 英語学習の得意・不得意に関する項目：「文法」「話す」「会話」
- 英語学習の好き・嫌いに関する項目：「授業好き」「ゲーム」
- 英語の有用性に関する項目：「英語仕事」
- 英語や英語圏への興味：なし

平均ランクを確認すると、いずれも第3グループのほうが高い値を示している。すなわち、小学校時は英語が嫌いだったが中学校時は英語が好きになった第3グループは、小学校の時点で上記の項目で有意に高い値を示している。

この結果を前回の及川（2016）と照らし合わせて解釈を加えてみたい。前回は第3グループと第4グループの違いを比較した結果、第3グループはほとんどの項目で得意だという印象や好きだという印象が落ちていることが明らかになった（表5）。

「文法」は第3グループも第4グループも小学校時は平均値が3を下回っており、どちらも文法は得意ではないと回答しているが、第3グループは中学校時に回答の数値が3を超えており、どちらかと言えば得意なほうに変化している。文法に関わる何らかの要素が好き・嫌いの変化に関連している可能性が指摘できる。第4グループは中学校時も数値が3を下回ったままで、統計上有意は変化ない。

「話す」は第3グループが小学校時よりも中学校時のほうが有意に高い値を示している。一方、第4グループは低い値を保ったままで、小学校時・中学校時に統計的に有意な変化はない。第3グループの伸びが英語の好き・嫌いに関連している可能性が指摘できる。ただし、有意に上昇したとはいえ、第3グループの小学校時・中学校時の回答の値はいずれも3を下回っており、得意になったとまでは言えない。

「会話」も「話す」と同じパターンを示しており、第3グループの伸びが英語の好き・嫌いに関連している可能性が指摘できる（ただし、第3グループの小学校時・中学校時の回答値はいずれも3を下回っている）。

「ゲーム」も「話す」「会話」と同様のパターンなので、第3グループの伸びが英語の好き・嫌いに関連している可能性が指摘できる。ただし、第3グループは小学校時・中学校時のいずれも回答の値が3を上回っており、第4グループとの大きな差が見られる。

「授業好き」は第3グループのほうが第4グループよりも小学校時は有意に高い値を示しているが、中学校においては、どちらも有意に上昇しているという点で同じパターンを示している。ただし、第3グループの回答値が3未満（=2.35）から3以上（3.86）へと変化しているのに対し、第4グループはどちらも3未満（1.95、2.14）のままである。換言すれば、第3グループは、授業が「嫌い→好き」と変化したのに、第4グループは「嫌い」のままだったということになる。

「英語仕事」は「話す」「会話」「ゲーム」とパターンが似ている。第3グループが小学校時よりも中学校時のほうが有意に高い値を示している。一方、第4グループは低い値を保ったままで、小学校時・中学校時に統計的に有意な変化はない。第3グループの伸びが英語の好き・嫌いに関連している可能性が指摘できる。しかも、「話す」「会話」「ゲーム」と異なる点は、第3グループの回答の値が3未満（=2.44）から3以上（3.07）へと変化しているのに対し、第4グループはどちらも3未満（1.72、1.84）のままである。換言すれば、第3グループは、授業が「嫌い→好き」と変化したのに、第4グループは「嫌い」のままだったということになる。

## 5. 考察

本稿は、及川 (2016) で収集したデータを再分析して、小学校時と中学校時で英語に対する印象 (好き・嫌い) が変化した生徒の小学校時の回答を分析し、特徴を調査してきた。「3.1. 目的」で述べた2つのリサーチ・クエスチョンを確認する前に、アンケートに使用した項目を因子分析を用いて整理したい。

具体的には、生徒全員のアンケートを用い、小学校に関わる19項目を対象に探索的因子分析を行った。因子の抽出には最尤法を用い、回転方法にはプロマックス法を用いた。因子数の決定には固有値1以上を基準とし、スクリープロットの検証も併せて3因子を仮定したが、「役に立つ」の項目の因子負荷量が.400を下回ったため除外し、再度3因子で分析を行い、表6の通り3因子が妥当と判断した (クロンバック  $\alpha = .949$ )。

抽出された3つの因子を構成する質問項目は、質問作成時に調査者が想定したグルーピングとほぼ同一であった。すなわち、第1因子を構成する「聞く」「話す」「読む」「書く」「Phonics」「単語」「文法」「発音」「会話」「授業簡単」はすべて「英語学習の得意・不得意に関する項目」に含まれている。英語ができる・できないに関わる項目なので、「スキル」と命名した。第2因子は「授業好き」「英語好き」「ゲーム」「歌」「教科書」から構成されているが、これらはすべて「英語学

表6：小学校時の好き嫌いに関する項目の因子分析 (最尤法) 結果 (パターン行列)

	因子		
	1	2	3
聞く	<b>.861</b>	-.036	-.041
話す	<b>.836</b>	.012	-.008
読む	<b>.828</b>	-.024	.038
書く	<b>.824</b>	.023	-.062
Phonics	<b>.809</b>	-.035	-.049
単語	<b>.804</b>	-.038	.045
文法	<b>.782</b>	-.049	.048
発音	<b>.770</b>	.015	.015
会話	<b>.649</b>	.163	.039
授業簡単	<b>.547</b>	.189	.016
授業好き	-.036	<b>.935</b>	-.007
英語好き	.189	<b>.705</b>	.005
ゲーム	.000	<b>.704</b>	-.051
歌	-.034	<b>.645</b>	-.058
教科書	-.040	<b>.509</b>	.118
旅行留学	-.033	-.074	<b>.923</b>
英語圏	.003	.026	<b>.767</b>
英語仕事	.202	.212	<b>.427</b>

因子抽出法：最尤法

回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法 (5回の反復で回転が収束)

習の好き・嫌いに関する項目」に過不足なくあてはまる。そこで第2因子は「好み」と命名した。第3因子の「旅行留学」「英語圏」「英語仕事」は「英語の有用性に関する項目」と「英語や英語圏への興味」のカテゴリーに属する。この2つには、英語を実際に使用するという観点が共通しているので、第3因子は「使用」と命名した。

【スキル】「聞く」「話す」「読む」「書く」「Phonics」「単語」「文法」「発音」「会話」「授業簡単」

【好み】「授業好き」「英語好き」「ゲーム」「歌」「教科書」

【使用】「旅行留学」「英語圏」「英語仕事」

上記のカテゴリーをもとに、リサーチ・クエスチョンに答えていく。

RQ-1：小学校時は英語が好きで中学校時は英語が嫌いになった生徒たちは、小学校時も中学校時も英語が好きだった生徒たちと比べた場合、自分たちの小学校時の英語やその関連要因にどのような印象を持っているのか。

クラスカル・ウォリス検定を用いて抽出された7項目を上記の因子分析の結果に当てはめると以下の通りとなる。なお、「役立つ」は因子分析の時点で除外されているので、実際は6項目になる。

【スキル】「読む」「書く」

【好み】「英語好き」

【使用】「旅行留学」「英語圏」「英語仕事」

ここから何か言えるのであろうか。まず【スキル】だが、「読む」「書く」に共通する要素として「文字」が挙げられる。現行の学習指導要領によれば、小学校の外国語活動における文字の扱いは、「外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」(第4章 外国語活動、第3 指導計画の作成と内容の取扱い、2. (1) イ)と定められており、必ずしも扱わなくてよいことになっている。そのため、体系的な指導が行われているとは言えず、地域ごと、学校ごと、教員ごとに格差が生まれる恐れがある。一方、中学校では「読むこと」「書くこと」を中心に文字の使用が不可欠となる。

前述の通り、本稿の分析自体はアンケートの項目と英語の好き・嫌いとの因果関係を立証するものではないが、因果関係を直接扱った過去の研究において、文字が英語嫌いを生んだ要因の1つとして挙げられている。例えば、國友(2012)では、英語が嫌いになったグループが挙げた理由の1つに文字が入ってきたことが挙げられている。また、井田(2015)においても、英語が「好き→好きでない」と変化したグループで「書くこと」が変化の大きな理由の一つとして挙げられている。

一方、小学校における文字の扱いが今後大きく変わる可能性がある。文部科学省が2013年12月に発表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」の中で、「読むことや書くことを含めた初歩的な英語の運用力を養う」という文言が入ったことで、小学校における文字の扱いが変わることになる。現在、文部科学省では学習指導要領の改訂作業が行われているが、文字の扱い

が大きくなることは既定路線のようである。もしそうだとすれば、いままで以上に文字の扱いを慎重にしなければ、中学校に入って英語が嫌いになる生徒が増える可能性があるだろう。

次の【好み】に属する「英語好き」は中学校に入ってから英語が嫌いになったこととの因果関係としては「小学校時に英語そのものが好きではなかったから中学時に授業としての英語が好きではなくなった」と「中学校時に授業としての英語が好きではなかったから小学校時に英語そのものが好きではなくなった」の2つが考えられるが、後者は時間の順序でも論理の点でも問題があるので、前者の可能性のほうが高い。しかし、因果関係の強さまで明らかにすることはできないので、今後は因果関係が明らかになる研究デザインを通してこの点を明らかにすべきであろう。

最後の【使用】も【好み】と同様に考えることができる。「旅行留学」「英語圏」「英語仕事」での高い値が中学校で英語が好きになった事実の一因になったと考えるほうが自然である。因果関係の強さを明らかにすることはできないものの、授業において、英語圏そのものや英語を使つての留学・旅行・仕事への興味を持たせることで、英語嫌いを減らせる可能性は十分に指摘できるのではないだろうか。

指導への示唆としては、まず文字の扱いを慎重にすべきである。本調査で文字に関わる要素が英語を嫌いになることと関連していた可能性があることを指摘できたことと、今後、文字の役割が大きくなる可能性が非常に高いことがその理由として挙げられる。また、英語圏への興味関心を含む「英語を使つてみたい」という気持ちを強く持つようにサポートすることも重要であろう。英語圏への興味関心を高めることは、現行の学習指導要領において「日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと」「異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること」(第4章 外国語活動 第2 内容 2(2)(3))と、その重要性が指摘されている点から考えても、小学校で推奨されるべき点であろう。

RQ-2：小学校時は英語が嫌いで中学校時は英語が好きになった生徒たちは、小学校時も中学校時も英語が嫌いだった生徒たちと比べた場合、自分たちの小学校時の英語やその関連要因にどのような印象を持っているのか。

抽出された6つの項目を因子分析で推定した3つの因子に当てはめると以下の通りとなる。

【スキル】「話す」「文法」「会話」

【好み】「授業好き」「ゲーム」

【使用】「英語仕事」

【スキル】では「話す」「会話」に「音声でのアウトプット」という共通点が見られる。また、【好み】の1つである「ゲーム」にも音声でのアウトプットという要素があるとみてよいだろう。英語での会話やゲームも含め、英語で話すことを得意あるいは好きだと感じた生徒のほうが中学生になって英語が好きになったということになる。1つの可能性として、小学校時に英語を好きでないと感じている生徒がこれらの活動に興味を持つよう配慮することが、彼らが英語を好きになるきっかけになるということが考えられる。文法については、國友(2012)で、英語が「嫌い→好き」と変化した参加者の理由に「文法ができるから好き」が挙げられている。この点を併せて考えると、

文法を得意と考えていた生徒が中学校で英語が得意になり、好きになったという流れも十分に考えられるだろう。

【好み】の1つである「授業好き」は、「小学校時に授業が好きだったから中学校時に英語が好きになった」と「中学校時に英語が好きだったから小学校時に授業が好きだった」の2つが考えられるが、後者は時間の順序や論理において無理があるので、前者の可能性のほうが高い。また、小学校の授業では会話やゲームが取り入れられていることが多いという事実を考えれば、「授業好き」が中学校時に英語が好きになった生徒と大きく関連している点も納得できる。授業を生徒が楽しめるよう工夫することが、英語を好きになる生徒を増やすことにつながる可能性があると言える。その具体例が「ゲーム」であろう。ただし、一口にゲームと言ってもいろいろあるので、今後はその中身について詳しく調べていく必要があるだろう。

【使用】の「英語仕事」はRQ-1でも有意差が確認されており、英語の好き・嫌いを分ける重要な要素である可能性が指摘できよう。英語を使ってみたいという気持ちが英語学習に対する動機を高め、学習意欲を維持した可能性がある。【使用】という名称が表す通り、授業においても、英語を「学習」するのではなく「使用する」という観点から活動を作ることが大切であろう。

最後に、及川 (2016) の結果との関連を見てみよう。及川 (2016) においては、「単語」「発音」「話す」「書く」「会話」「英語好き」が英語の好き・嫌いに大きく関わっている可能性があることを指摘し、特に、「語彙」と「産出」が関わっていると指摘した。「産出」は今回の調査で抽出された「話す」「会話」「書く」「ゲーム」との関連が深く、今回の結果と併せても、重要な要素であることは十分指摘できそうである。しかし「語彙」に関する項目は今回直接現れなかった。ということは、語彙は中学校以降での学習に関わっているのかもしれない。小学校時は単語などを覚える必要はなかったが、中学校時はそれらを覚える必要が出てくるため、それができること・できないことが英語の好き・嫌いの変化に関わったのかもしれない。より詳細な調査が必要であろう。

## 6. おわりに

本稿では、生徒の小学校時の要因を中心にすることで、英語の好き・嫌いの変化に関する要因を調査した。その結果、「読む」「書く」「話す」「文法」「会話」(以上が「スキル」に関する項目)、「英語好き」「授業好き」(以上が「好み」に関する項目)、「旅行留学」「英語圏」「英語仕事」(以上が「使用」に関する項目)が関連の深い項目として抽出された。しかし、これらと英語の好き・嫌いとの因果関係は十分に説明できるとは言い難い。また、小学校や中学校での授業にこれらをどのように生かしたらよいかという点も十分に議論されていない。今後はこれらを考慮に入れた研究デザインを用意し、調査を進めるべきであろう。

### 参考文献

- 井田真由美 (2015) 『コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動の研究～小中連携の視点から、これからの教員研修のあり方を考える～』(平成26年度埼玉県長期研修教員研究報告書)
- 英語教育の在り方に関する有識者会議 (2014) 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」
- [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm) (2016年3月31日現在)

- 及川賢 (2015) 「英語学習への意識の変化に関わる要因—小学校時及び中学校時の英語の好き・嫌いとの関係—」『埼玉大学紀要 教育学部』第64巻 第2号、pp.199-212
- 及川賢 (2016) 「小学校時及び中学校時の英語学習に対する意識の変化とその関連要因」『埼玉大学紀要 教育学部』第65巻 第1号、pp.145-165
- 國友達朗 (2012) 「小学校『外国語活動』・中学校『英語』嫌いの原因を探る」(埼玉大学教育学部提出の卒業論文)
- 竹内理・水本篤編著 (2014) 『外国語教育研究ハンドブック【改訂版】研究手法のより良い理解のために』(松柏社)
- Benesse教育開発センター (2011) 「第2回小学校英語に関する基本調査(教員調査) 2010ダイジェスト」株式会社ベネッセコーポレーション <http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3179> (2016年3月31日現在)
- Benesse教育開発センター (2012) 「小・中学校の英語教育に関する調査～中学1年生の目から見た英語教育とは?～速報版」株式会社ベネッセコーポレーション <http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3178> (2016年3月31日現在)

(2016年3月31日提出)

(2016年5月10日受理)